

1. はじめに

本発表の目的は、Chomsky (to appear)で提案されたボックス理論のもとで、ラベル理論 (Chomsky (2013, 2015)) の位置付けを考察することである。ラベル理論は、EPP や *that*-痕跡効果の他に、移動 (内的併合) の連続循環性や規準位置凍結効果などを説明可能であるとして経験的に動機づけられてきた。しかしながら、連続循環移動による統語派生を認めないボックス理論において、規準位置凍結効果をラベル付けアルゴリズムによって説明することはもはや不可能であることを論じる。代案として、「ボックス化」とボックス化要素への「アクセス」の一つの定式化を提案することによって、規準位置凍結効果を分析する。

2. ラベル理論

本節では、Chomsky (2013, 2015) によるラベル理論を概観する。これが仮定するラベル付けアルゴリズムは、句同士が併合した[XP YP]構造に対して、(i) XP と YP が共有する素性 F について一致しているか (この場合ラベルは[_{F, F} XP YP]となる)、(ii)XP と YP の一方が移動して痕跡 (下位コピー) となっている (この場合ラベルは[_{YP t_{XP} YP}]となる) ことを要求し、(iii)いずれも満たさない構造は不適格と見做される。連続循環移動はフェーズ不可侵条件 (Chomsky (2000, 2001))とラベル理論の帰結である。PICに従うと、移動はフェーズの先端を着地点とする。移動先の構造が(iii)に該当する限り、(ii)によってラベルをつけるために、より上方への移動が強いられる。(i)の配列に至ると移動を停止することができる。故に、(1a)は補文 α のラベルが決まらず、(1b)に至るようなさらなる移動が求められる。一方、(1c)のように *wh* 句が補文指定部で $C_{[Q]}$ と一致できればここで移動を停止できる。

- (1) a. * $C_{[Q]}$ they thought [α [in which Texas city] $_{[Q]}$ C JFK was assassinated t]?
 b. [β [in which Texas city] $_{[Q]}$ did $_{[Q]}$ they think [α t C JFK was assassinated t]]?
 c. C they wondered [α [in which Texas city] $_{[Q]}$ $C_{[Q]}$ JFK was assassinated t] (Chomsky 2013: 44-45 より一部改変)
 d. * Which dog do you wonder [α t $C_{[Q]}$ John likes t] ? (Chomsky 2015: 8 より一部改変)

また、(1d)のように、一致配列を一度なすと、その構成素はさらに移動を受けることができない (規準位置凍結効果)。Chomsky (2015)では、 $C_{[Q]}$ を主要部とする構成素は、*wh* 句をその指定部に置いて[_{<Q, Q> wh $_{[Q]}$ [C $_{[Q]}$...]}]とすることで *wh* 疑問文の解釈を持つとし、[$C_{[Q]P}$ t_{wh} [C $_{[Q]}$...]]は T-to-C 移動と上昇調を要求する直接 *yes-no* 疑問文として解釈されると仮定することで規準位置凍結効果を説明している。すなわち、間接疑問文を選択する *wonder* などの動詞の補部が<Q, Q>ラベルを持つ場合、補部は間接 *wh* 疑問文として適当な解釈を持つが、補部が $C_{[Q]P}$ をラベルとする場合、誤って直接 *yes-no* 疑問文の解釈を受け、*gibberish* として CI インターフェイスで破綻するのである。

3. ボックス理論

本節では Chomsky (to appear)で提案されたボックス理論がいかにして連続循環移動を破棄するかを見てゆく。Chomsky (to appear: 4-5)は、意味論的二元性 (duality of semantics) を併合演算の二つの適用様式に対応づける。言語機能が構築する思考には、基本的な θ 構造にあたる命題的範疇と、発話の力や情報構造に関わる節的範疇があり、前者は外的併合(EM)によって、後者は内的併合(IM)によってそれぞれ派生されるというものである。

IM は θ 構造 (命題的領域) の要素を節的領域に移す機能を持ち、IM が形成する集合は θ 構造を形成しない。ここから、IM を受けた要素はさらなる IM の適用を受けないという帰結がもたらされる。このことは、移動 (IM) の連続循環的適用が原理上不可能となることを含意する。IM された要素が θ 付与や IM といった命題的領域に対し可能な演算から秘匿されていることを「箱に入れる」ことに喩えて、これをボックス理論という。

ボックス理論では、(2a)は(2b)の構造を持つ。連続循環移動の派生(2c)と比較されたい。(2c)では *wh* 句が転置を受け文頭で実現する事実を、*wh* 句が CP 指定部に IM することによって説明する一方で、(2b)では同じ説明が維持できない。これに対し Chomsky (to appear)は、ボックス化要素への「アクセス」の機構を仮定する。vP2 の位置でボックス化された *who*₂ は、CP フェーズの段階で「アクセス」され、これにより文頭への転置を導くのである。

- (2) a. Who does Bill admire?
 b. [C [Bill₂ [T [vP₃ Bill₁ [vP₂ who₂ [vP₁ v V who₁]]]]]]]
 c. [who₃ [C [Bill₂ [T [vP₃ who₂ [vP₂ Bill₁ [vP₁ v V who₁]]]]]]]]]

4. ボックス理論におけるラベル

本節ではボックス理論におけるラベルの扱いを概観する。Chomsky (to appear)には、ラベル理論が維持されてい

ることを示唆する記述が見つかる。以下の引用では、A 移動の扱いが議論されている。

Since SPEC-INFL is not at the phase level, it is not accessed at later phases. Therefore, it need not to be boxed. And it shouldn't be, since unlike boxed elements, SPEC-INFL is accessible to other operations (Agree, Labelling, Anaphora) (p. 15)

ここから、共有素性によるラベルがボックス理論でも想定され、ボックス化はラベル付けに対する不可視化を含意するという考えが伺える。また、以下の引用では部分的 wh 移動の中間 CP のラベルの問題が議論されている。

With successive-cyclic movement, in such German expressions as [12] there is a labelling violation at [2, which is not in the criterial position [1 (t the variable copy of wh-XP):

[12] [1 was [C...[2 wh-XP [C...t...]]]]

The problem doesn't arise in the box theory. At [2, the boxed wh-XP is accessed and under Externalization, spelled out, but with no labelling problem since the phrase does not appear in the derivation. (pp. 15-16)

素性を共有しない 2 つの句がなす集合にはラベルがつかないという想定が維持されていることがわかる。

Chomsky (to appear)には wh 句の規準位置のラベルについては言及がないが、ボックス理論では wh 句が規準位置である CP 指定部までは移動しないことを踏まえると、ラベルに基づく規準位置凍結効果の説明が維持できないことを指摘したい。Chomsky (2015)では C_[Q]P ラベルと<Q, Q>ラベルの構成素に対し、異なる解釈を与えることによって、wonder の補文 CP 指定部から wh 句が移動することを阻止していたが、wh 句が CP 指定部を統語的に占めないボックス理論において疑問文のラベルを区別することはできない。

5. 提案

本節では、ボックス化とアクセスのいち定式化を提案する。まず EM の意味的・音韻的解釈は 2 要素の関数適用および線形化とする。IM については、(i)移動元のコピーは空の変項として解釈され、(ii)ボックス化が起こる移動先のコピーはその位置では解釈を受けないと考える。IM が派生する構造[v_{P2} wh2 [v_{P1} v V wh1]]において、v_{P2} の意味・音韻解釈は v_{P1} のそれを引き継ぎ、解釈上 wh2 を無視した非枝分かれ節点と見做される。これにより、v_{P1} による wh2 への θ 付与を回避し、v_{P1} の選択特性を維持する v_{P2} と併合する外項に θ 付与が起きることが保証される。アクセスとはボックス化要素に然るべき位置で解釈を与えることである。解釈を保留された wh2 は、自身と選択関係にある構成素 X を含むフェーズにおいてアクセスされ、解釈を受ける。C[Q]を主要部とする構成素は、wh 句との関数適用により wh 疑問文として解釈され、さもなくば yes-no 直接疑問文として解釈される。Chomsky (2015)に従い、動詞は前者の疑問文を補部を選択するが、後者は選択しないと仮定する。

6. 分析

(3a)の補文 CP を含む主節 v*P フェーズの段階で[which dog]2 にアクセスし、これと CP を関数適用、また wonder と CP の間に線形化することで(3b)が得られる。主節 CP 構築後にアクセスする場合、which dog2 は主節 CP に適用し、文頭で線形化されるが、yes-no 疑問の解釈を持つ補文 CP と wonder の間に選択制限違反が生じ、破綻となる。

- (3) a. C_[Q] you wonder [C_[Q] John [[which dog]2 likes [which dog]1]]
b. Do you wonder which dog John likes
c. * Which dog do you wonder John likes

さらなる帰結として、wh 句の作用域である CP を含む v*P フェーズの範囲内で、wh 句の意味解釈位置と音韻解釈位置がずれても良いことが予想される。実際、wh 句は主節の動詞と付加詞に介在して線形化されることがある。(4a-b)いずれにおいても、主節動詞が選択する CP の指定部よりも左側に wh 句が現れている。一見規準位置凍結の反例と見えるこの現象は、CP を選択する figure out/asked の v*P フェーズ内で wh 句を意味的には CP と結合し、音韻的には動詞の直後に線形化させることによって派生されると考えられる。

- (4) a. Red is assembling those clues and trying to figure [what] out [CP Fitch was trying to warn him about].
b. He asked [who] in a sarcastic tone [CP she had spent the night with] (Kitada (2021: 41))

主要参考文献 Chomsky, N. (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," *Step By Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik* ed. by R. Martin, D. Michaels and J. Uriagereka, 89-155, MIT Press. Chomsky, N. (2001) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language* ed. by M. Kenstowicz, 1-52, MIT Press. Chomsky, N. (2013) "Problems of Projection," *Lingua* 130, 33-49. Chomsky, N. (2015) "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond: Studies in Honour of Adriana Belletti* ed. by E. D. Domenico, C. Hamann and S. Matteini, 1-16, John Benjamins. Chomsky, N. (to appear) "The Miracle Creed and SMT," *Issues in Comparative Morpho-syntax and Language Acquisition* ed. by G. Bocci, D. Botteri, C. Manetti and V. Moscati. Kitada, S. (2021) "Strategies for Transfer," *Explorations in English Linguistics* 35, 29-51.